

発行 長野県美術教育研究会 更埴支部	長野県美術教育研究会会報 第 115 号	発行人 長野県美術教育研究会 更埴支部 支部長 梅田 久仁(戸倉小) 編集人 吉池光則(治田小)
-----------------------------------	---	---

巻頭言

第 75 回「長野県美術教育研究大会」更埴大会を終えて

更埴大会運営委員長 梅田 久仁（戸倉小学校）



「ひびき合う感性『私っていいな!』楽しく“子どもアート”」…11 年間継続してきた長野県美術教育研究会の研究テーマのもと、今年度の更埴大会では「ふるさとで楽しく子どもアート」をテーマに掲げ、実践を重ねてまいりました。そして今も、それぞれの現場で実践が続けられている毎日です。

11/12 の更埴大会には、新型コロナウイルス感染症が猛威をふるう間隙を縫うようにして、県内各地より大勢の会員の皆様が足を運んでくださいました。

無事に大会を開催することができた裏には、ご後援くださった長野県教育委員会、千曲市教育委員会、坂城町教育委員会、更埴校長会、更埴教育会、信濃教育会、及び授業を提供してくださった治田小学校、更埴西中学校の皆様のご理解とご尽力があったればこそです。あらためて深く感謝申し上げます。

with コロナ時代における大会運営、いくつもの工夫が込められた取り組みとなりました。たとえば…、

- ・ 公開授業と研究会のみのシンプルな午後開催。
- ・ 紙面による資料作成経費を節減し参加費を無料化。
- ・ デジタル化した資料を県美研の Web サイトを活用してスピーディに提供。
- ・ アンケートは Google フォーム形式ですばやく簡単に。

…といった具合です。その Google フォームのアンケートには、次のような感想が寄せられていました。

「コロナ禍から学んだことを生かした研究大会になったと思います。2 年ぶりの参加でしたが、懐かしい先生方や新たな若手の先生方の姿も見られ、元気をいただきました。実際の授業を見ること、顔を合わせて話し合うことのよさをあらためて感じました。」

お互いの交流が途切れてしまいがちなコロナ禍だからこそ授業を見る、顔を合わせる事がことさらに大切に思えてきます。そして、ここでもあそこでも図美が止まっていないことを知る、ここでもあそこでも子どもたちの成長が止まっていないことを知る…。これこそが、更埴の地に大勢の会員が集い、確かめ合ったことではなかったでしょうか。

図美を止めてなかったのは、あなただけではなかったのです。一步一步成長する子どもたちの姿に心を配っていた仲間は、ここにもあそこにもいたのです。私自身が、そんな発見をさせていただいた大会となりました。

県美研の大会には、図美を見つめる子どもたちと図美を見つめるわたしたちの居場所があります。

昨年度は、並々ならぬご苦勞のうえに感染症対策を万全にしながら下伊那大会が無事にとりおこなわれました。そこから受け取った思いが今年度の更埴大会へとつながりました。そして、ここからまた次年度の長野（全道連）大会へと歩みがつながっていきます。

たくさんの皆様のお力をお借りして、前大会から頂戴した「第 74 回から第 76 回につなげていく使命」を果たし、ここにたすきを渡します。今大会を支え、貴重な学びと経験を与えてくださったすべての皆様に心から感謝申し上げます。



更埴西中で大会当日の授業時に制作した生徒による「田毎焼き」。本焼きまで終えた作品。

令和 3 年度長野県美術教育研究大会 成果と課題

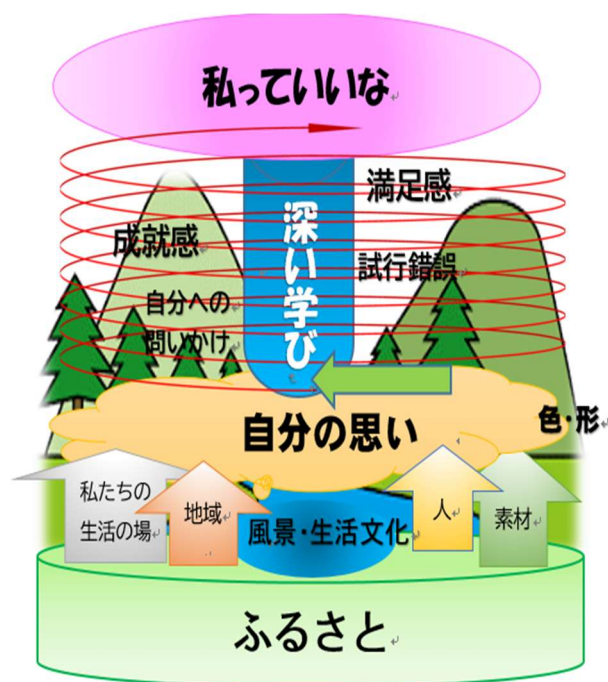
更埴支部

1 更埴大会研究テーマ

<更埴大会テーマ> 「ふるさとで楽しく子どもアート」

2 研究テーマについて

更埴支部では、「子どもアート」が、子どもたちの将来に無限大の可能性と希望を与えるものとなるように、自らのよさに気づき、自己肯定感を高めるための研究を進めてきた。私たちの造形活動には、慣れ親しんだ風景や生活文化からの借景から生まれるところがある。それは、日常的すぎて、意識をしないと自覚できない要素でもあり、自然に造形的な要素として表れてくることが予想される。そこで、子どもの「思い」を日常生活や地域と結びつけることで、試行錯誤しながら表現活動を楽しむ子どもの姿から研究を深めていきたいと考え、「ふるさとで楽しく子どもアート」を本研究テーマに設定しました。「ふるさと」を「地域やわたしたちの生活の場」とであるととらえ、いつの時代も子どもたちの学びや成長に大きな影響を与えてきた「ふるさと」に焦点を当てて実践を進めてきた。



3 研究の方向と目指す子どもの姿

①地域や生活の場をあらためて見つめることで「思い」を広げる題材について

子どもたちが、見慣れた地域や場所を、造形的な視点であらためて見つめ直すことで、新たな発見をして、わくわくした気持ちで自分の思いをのせながら造形活動をする姿。

②表現活動を楽しみながら自信をもって表現活動に取り組む姿

新たな素材との出会いや見る人や使う人の気持ちを考えることで、子どもたちのたくさんのアイデアが生まれることと思います。自分の考えた世界が広がり、わくわく感や成就感を感じながら活動していく姿。

③自分や友の「思い」や「良さ」を伝え合うことで表現活動を振り返る姿

学校、地域への「思い」を共有することで、共感したり、アイデアを広げ、自分の制作を振り返り、表現に活かしていくことができ、「思い」が見る人や使う人に伝わるように制作する姿。良さや困り感を共有することで、情報交換や支援をしながら、制作の見通しをもち発想や制作の場面で友と関わる姿

④造形活動が豊かになる Chromebook (タブレット) の活用

①地域や生活の場をあらためて見つめることで「思い」を広げる題材②表現活動を楽しみながら自信をもって表現活動に取り組む姿③自分や友の「思い」や「良さ」を伝え合うことで表現活動を振り返る姿を具現

するために、Chromebook（タブレット）の活用。

4 研究の方向からみえてきた姿や成果

①地域や生活の場をあらためて見つめることで「思い」を広げる題材について

- ・小学校低学年では、学校というふるさと、自分たちの生活の場への思いから、場所を選んだ理由や制作への思いとともに発表する姿がみられ、自分で選んだ場所で十分に試行錯誤することができた。
- ・小学校高学年では、慣れ親しんだ校舎を治田小学校 50 周年記念によせて、見る人に楽しんでもらいたいという題材設定のよさがあった。図工の授業を創造する上で、「何が楽しさのなか」「どこに面白さがあるのか」ということを考えていくと、単元のスタートにあたる題材設定が重要であることがみえてきた。
- ・中学校の授業では、地域の素材からイメージを広げる生徒の姿がみられた。自分たちの地域にあるものを使いながら素材にしたことで必要感が出た。つくる目的意識がしっかりとしていた。

②表現活動を楽しみながら自信をもって表現活動に取り組む姿

- ・小学校低学年では、セロファンにしぼったことで、色を 3 原色にして、形あらかじめは正方形にしたことで、形をつなげてダイヤや長方形にするなど活動が広がる姿があった。
- ・中学校では、マグカップから皿になったことで、工夫や思いを込めやすくなり、表現を深めていく姿があった。

③自分や友の「思い」や「良さ」を伝え合うことで表現活動を振り返る姿

- ・高学年の授業で、全体で個人の作品を見合う場面で、友だちの作品を真剣に見合っていたり、授業の後半、友だちが場をどのように変えたのか見合ったことで、今後、自分が描き足していく時の参考にしていける姿があった。
- ・地域の店や施設などに作品を展示させてもらい、感想を頂くことを楽しみにしている生徒たちが、作品に思いを伝えようとする姿が見られた。

④造形活動が豊かになる Chromebook（タブレット）の活用

- ・発想することが苦手な子どもにとってロイロノートを使ったことは、色を塗ることでイメージを視覚化でき、試行錯誤できるので有効であった。
- ・高学年授業よりタブレットのよさ
 - 描いてすぐ消すことができる。また、すぐに消せる。
 - 編集した画像を容易も比較することができる
 - 画像を拡大したり縮小したりすることができる。
 - 制作の経過をタブレットで撮影していくことで、新しい発見が生まれる。
- ・スライドやジャムボードで瞬時に意見の交換ができる。

5 課題

- ・活動場所は、子ども達の思いだけで広げてしまうのではなく、お互いの活動が意識できる距離感で行う必要があることなど、子ども達の活動しやすさを追究していく必要がある。
- ・造形的な視点がいかされるように、造形的な視点で振り返りをする。
- ・タブレットの活用 活用することが目的とならないように
- ・県の素材を大事にして、資質能力を育成するためにどうしたらよいのか

治田小学校 3 年 低学年図工部会 研究の成果と課題

1. 授業者反省（神田）

- ・元気でパワーがあふれていて友とぶつかることもあるが、一つに向かうと力がすごい。
- ・自分の言葉で言えるように、問い返すことを心掛けた。
- ・慎重にやっている。何か失敗したくないなと思っていたか。
- ・一つの形の向きでダイヤ、四角だが、リボン、ハート、三角などは、組み合わせでできる形。三角は折ってもいいのかと混乱している児童がいたので、口頭だけでなくそのままの形で組み合わせを意識させると良かった。

2. 授業を通しての子どもの姿

・TH さん

昇降口のガラスの前に置いたイスの板の上に、学習カードの図を見ながら、カラーセロハンを並べはじめた。隣で活動している MS さんがスプレーでガラスにカラーセロハンを貼りはじめると、スプレーを持ち、貼る部分にスプレーの液体をかけていった。学習カードの図をもう一度見て、イスの上に並べたカラーセロハンを手にとると、ガラスに貼った。そして、上にずらしながら次のセロハンを重ねて貼った。くびをひねり、先ほど貼ったセロハンをはがして、もう一度スプレーをして 2 c m ほどずらして貼った。貼りながら、図と違う形に少しずつなっていた。「イスでやった意味なくなった。全然違ったんだけど。」と、笑みを浮かべながらつぶやいた。

活動が進むと、隣の SA さんが TH さんの作品を見て、「花火？」と聞いた。「花火って言うか…。」そのまま活動を続け、5 分程経ったところで「花火にしようと思ったけど、□になっちゃった。」と SA さんに話しかけた。

その後、SA さんの作品を見て、自分も似た組み合わせをして貼り、「どうリボンぽく見える？」と聞き、SA さんが「中と小」と言ったところで、TH さんが「これ、大にすれば良かったってことかな。」と言い、「これともう 1 個リボン作るには、大にするか。」とつぶやいて、大きなカラーセロハンを手にとった。

このように、学習カードに書いた図の通りに始めたが、友と関わりながら自分のイメージや思いを広げていくことができた。

・KA さん

昇降口のガラス扉の前に座り、下からのぞきこむようにして外を見た。カラーセロハンをガラス扉の下の方に重ねて貼った。顔をしかめると、近づいてきた神田先生に「茶色ができない」と話しかけた。神田先生が「赤と青で何ができるかな。」「ありがとう先生。」笑顔になった KA さんは、カラーセロハンを重ねて赤黒っぽい色を作りながら、外を見ながらだんだんと上に伸びるように貼っていった。先生が「友だちの作品を見に行ってもいいよ」と大きな声で伝えていたが、「そんな時間ない」と隣の HH さんと一緒にどこにも見に行かずに自分の作品と向き合っていた。活動の残り時間が少なくなってきたところで、今まで重ねて貼っていた色とは違う、赤のみのカラーセロハンをもち、赤黒いところ上部に貼っていった。黒（茶）と赤の貼っ

た KA さんの視線の先には、昇降口のロータリーの中に生えている大きくてみごとな赤色に紅葉したカエデの木があった。KA さんは、顔をずらしながら、モミジの葉と重なるように赤のカラーセロハンを貼っていった。

このように、ガラスの向こうに見える木の景色を借景して、自分の作品に取りこんでいく姿も見ることができた。

3. 授業研究会

(1) 質疑

- ・色の 3 種類と大中小の大きさは。

色については、色水の活動で行った 3 原色で馴染みの深い色
混色など既習から想像しやすいと考えた。

大きさについて、前時は最小の 5 cm のみ。窓は大きいので、活動の広がりも考慮して大きい 10 cm のサイズも考えた。中の 7 cm は、ダイヤにしても、大の 10 cm からはみださないサイズと考えて用意した。

- ・板書の造形要素は。

並べ方・形・色とした。

- ・例は子ども達から出たものか。

前時の 3 枚から出たものを子どもたちと共通点に着目してグループ分けしていった。

- ・治田小をきれいにしよう。学習カードの構成について。

どこにきれいしたいのか。

なぜその窓を選んだのか。

設計図については、絵画的なものの要素として、書きたい児童が書いた。

思い浮かんだ子は書いたが、途中から降ってきたらやりたいという児童は書いていない。

(2) 協議

- ・ワクワクして早くやりたいが伝わってきた。

学校に。生活の中で見てもらえるのがうらやましい。やる気に繋がっていた。

導入の場面で並べ方、形、色を子ども達から引き出していた。

この観点を意識して、作っていた。一人が作っていたが、友だちともかかわっていた。

見合う時間もあるが、すぐ自分からやっていた。

どの作品も同じものが一つもなく、すばらしくよかった。

- ・造形要素の整理、見てもらうやる気がよかった。

- ・並べ方、形、色の要素がわかりやすく進行した。

黒板に要素ごと書いたことによってすっきりしたが、そこにとらわれてしまうことも考えられる。要素にあげた中身については、検討も。

あきと…設計図の通り作ろうとした。

IH くん…「作るつもりなかったけど、鳥になってきた。」これやったらどうかな。

その場でのひらめきを大事にしていた。

活動の中で、色の重ねやどこに持っていくかなど、つかみかけていた。

ロケットは、つける力と違っていた。

活動を振り返ってどうだったかを最後書いておくと、アウトプットの訓練になった。

- ・ HH さんと KA さん…マイペースな二人。

どうすれば、幹の感じが出るのか。黒っぽくなった。

全然進まない。自分の作りたいものがはっきりしていた。学習カードに花を作りたい。黄色と青と赤で貼った。ちょっとずらしながら、はっていく。2 つ目は、1 回目とは違うやりやり方でずらしながら変えてやっていた。後半、集中してやっていた。

人の作品を見る時間も目もくれず、ずっと作っていた。

周りの環境に合わせて自分たちが、考えながら作っていききたい。

玄関、まわりの景色が見える。それに合わせて作っていた。

- ・ お互いに認め合っていて、「いいじゃん。いいじゃん。」といい感じ。

KA さんは、木の幹の茶色を作りたいかったが、色を重ねてもなかなか思うような色ができなかった。

HH さん、学習カードにかんがえたことができた。

KA さんは、幹に後ろの赤い紅葉の木で赤いセロハンを使っていた。借景をしていた。

共有の仕方。見合いつこタイムは、途中がいいが、終わりがいいかは迷う。

最後、昇降口をきれいにできてよかった。

- ・ SM さん、斜めにわずかに重ねていく。右に大きなものを貼る。美しいな。

HH くん、「50 周年」と作ったが、先生がまとめの場面で「造形要素」に戻って切り返したのが良かった。

どんな区分けをしていったか。ここの重なり方。

きれいの着地点。きれい、美しい。

結びで切り返した造形要素を戻ったところがすばらしい。

黒板に書いてあったことが、あたらしい発見。

リズム感 空間 バランス間隔、友だちから情報を得る。

材との対話、とてもいい力。友との対話や作品も視野に入れて取り入れて、新 CS の思考判断に繋がっていた授業だった。

- ・ 教師の出。どの学級でも難しい子とどう工夫するか。

導入とまとめ、工夫されている。

活動中の支援について、もの、場所に関わって、

HH さんに「思った通りにやっていけばいいんだよ。」「先生ありがとう。」

KA さんに「赤と青で何ができるかな。」「ありがとう先生。」と対応がすばらしかった。

教師の対応として、いいたいことは論理的じゃなくていい。

教師の反応を求めている。何がいいの。リアクションをもとめている。

なにかあればいい。また次にわかればいい。

先生、活動のつけたい力に対して、びしっと条件付けをしていけばいい。

この活動がどこに見ているか。

翌朝、見た他の人達が、どう言うだろうね。どんな反応があるのかな。認めてもらえた自分たち。図工を越えたふるさと、学校をきれいにしたい、訪れた人に見てもらいたいという思いが良かった。

4. 指導者 豊科東小学校教頭 志摩宏道先生のご指導

(1) 研究や指導案から

- ・ふるさとにスポットを当てる良さ 素敵なこと。

ふるさとや自分たちの生活の場、色や形の力をのばしていく。

学校というふるさとを大事にする、学校への愛が土台になっている。

- ・材について、セロハンは切りにくいという 2 年生での経験。

できる状況づくり。あらかじめ正方形にしておくことで迷いなく、やれていた。

色水、ペットボトルの既習事項を生かしていた。

- ・セロハンにしぼったことで、多様な表現ができる。

(2) 授業から

- ・導入が上手。構造化した板書。

言葉だけだったので、表現がマッチングできるとイメージがわかる。視覚とマッチング。

- ・導入でその場所を選んだ理由を聞いたとき、HH くんは、「夕方の光できれいになる」と言った。感動した。その後の制作活動も見なくなった。

HH くんは、縦にダイヤを並べる。その通りに並べる。瞬時にやる。

今日は色を重ねたいというねらいだった。並べた一番最後のセロハンに、重ねてきた。思いついて活動を広げていった。

その通りにやると設計図になってしまうので、それを越えていく。

KR くん、さかなの形になった。セロハンの大中小があったおかげで、最後、小さいのを選んで、目として入れてできた。

評価は、魚ができたよ。だとできない。

評価は造形要素に戻ってするといいい。

HH ちゃんと KR くんは、その後、別の場所で共同して作成した。

こだわりがすごい。「50 周年」を作ろうとするが、「周」の中が細かくてできない。

考えて考えて、セロハンを半分に折って、「周」の中を作った。

折った姿を認めたい。教師の自分たちを越えてきた。

HH くんは、これは、最後の 50 周年を、このスペースを 50 周年のお祝いで作ったんだよ。活動場所の題名として、見てくれる人に伝えたいという伝え。

まとめの場面で、並べ方と形の工夫は扱えた。最後、色も工夫をとりあげると良かった。

(3) 今後に向けて

光の題材。どの学年にも造形遊びや絵として位置されている。

光の魅力は、「透過性」と、「遮光性」。

透過性は、より鮮やかになる。影に色が付く、すばらしさ。華やかな空間ができる。

遮光性については、影絵。変化する魅力。

表現方法の吟味。

「並べる」と「重ねる」。

重ねる良さ、並べるより複雑な表現ができる。

重ねることで、「組み合わせる」活動へ。より複雑な方法へ。学年に応じて。

今回の授業、素敵な授業だった。

5. 今年度の成果と課題

- ・低学年部会は、事前研究授業として色水のペットボトルづくりで、色の混色を子ども達は活動を通して学び、そして作成したペットボトルを並べて校舎をきれいにしたいという願いで授業を行った。このときの課題として、課題設定や活動のまとめで、自分の思いを言葉で表現できること、活動場所は、子ども達の思いだけで広げてしまうのではなく、お互いの活動が意識できる距離感で行う必要があること、子ども達の活動は、こちらが思っている以上に学校をきれいにしたいという願いや色の組み合わせ（同系色）やグラデーションの意識が高いことが分かった。そして、色水のペットボトルを並べて美しくなった要因の一つに、色のバリエーションは無数にあるが、ペットボトルの形が同形状であったことが上げられた。本番授業に向けて上記のことを考え、子どもたちの思いや考えを引き出す問い返しや、書くことなど表現力を図工だけでなく、他の授業でも意識して取り組んできた。

研究授業では、どうしてこの場所を選んだのかの問いかけで、廊下のガラスを選んだ HH くんは、「夕方だと光がばあーと入ってますますきれいだから、この場所を選んだ。」と発言し、児童昇降口を選んだ HH さんは「朝の光が差すからと、みんなが入ってきたら最初にきれいとも見てもらいたいから玄関にした。」と発言するなど、自分の選んだ理由を制作の思いとともに発言することができた。

付ける力を明確にすることについては、学習課題の設定での造形要素に着目しての板書や、最後のまとめ

で文字を作っていた児童の作品を否定せず、先生がその作品の形や色としての造形要素について認めていったところが、付ける力がぶれずに子ども達にも作品作りを通して、伝わっていくことができた。「造形要素」に戻って、評価する大切さ。

活動の素材は、やり直しができる教材として、カラーセロハンを水に液体洗濯のり（PVA）を混ぜたスプレーをかけて子どもたちは迷いながら貼ったり、眺めてはがしてまた場所を少しずつらして貼ったりという自分のイメージにあう制作を行う活動ができた。

色は、3原色にしたことで、色水での活動を想起してこの色を重ねるとできるかもと見通しを持ちながら制作をおこなうことができた。形は、正方形としたことで、ななめのダイヤや正方形、つなげて長方形など、活動を広げることができた。そして、大、中、小のサイズは、ガラス面の大きさに合わせて、小は大の4分の1、中は大の中で斜めのダイヤにしてもはみ出ないサイズを考えて、数を多めに持たせて、重ねて貼っても足りなくならないようにすることができた。

教材研究の成果として、子ども達は、自分の選んだ場所で自分の考えたイメージを試行錯誤しながら十分に制作することができた。

・課題は、学習カードのあり方だった。ガラス面が広いので、自分のおよそのイメージや取りかかりのイメージのために、前時に色鉛筆で書ける児童や書きたい児童はイメージ図を書いた。書いた児童の中には、実際の活動でその図の通りに作りたいというような様子もはじめのうち見られた。だんだんと活動が広がっていった、図の通りではなくなっていったが、図をあったことで、安心して取りかかれる児童もいた反面、図を書いたことが設計図のように児童の中には大きな存在になってしまった姿も見られた。

今回は、いろいろな重ね方や並べ方を通して最初のイメージをふくらませていく姿を重視することや造形遊びの学習のねらいではなかったため、学習カードの図もおよそとして書いてみることで取り組んだが、最初の図がない方が、色や形、場所からイメージを思いつき、イメージがふくらむ児童もいたように考えた。

治田小学校 6 年 高学年図工部会 研究の成果と課題

1 授業者反省（木下）

- ・絵が苦手な児童が多い中、楽しい空間を変えようと積極的に取り組む姿が見られた。
- ・子どもたちに空間を作り替える、実際に作るという意識が共有されていなかった。材料等を考えながら設計する意識がなく、空想的な作品にしまっている児童が多くいた。
- ・つまずきが見られる児童には、個別の取り組みが困難だった。見通しの場面で、もう少し教師が自作の作品を提示しておく必要があった。
- ・ICT を活用した図工の授業として、特に絵を描き直したり、やり直ししたりできるという部分で、新規性がある授業実践で合ったと思うが、見立てアートの面白さについて、もっと教師自身追究する必要があった。

2 授業を通しての子どもの姿

・MY さん

体育館のステージを前時から使いたいと考えていて、本時でも体育館のステージ側の写真を使って、魚の絵を描いたり、水族館をイメージしてしたりする生き物を描いていた。1 時間黙々とやりながらも、時折となりの A さんを見て描いている絵は違うのだけれど色合いを参考にしていた。水色を基調にステージを水族館に見立て作り上げていた。

・IO さん

前時に撮った写真に描き込むことはせずに悩んでいたが、写真をもう一度撮りに行き、北校舎 3 階廊下の棚の写真撮って、体育館へ戻った。撮った写真を開き、棚の部分を水色で塗っていく。縁の部分がわかるように塗った所を消して、別の水色で塗っていく。時間ぎりぎりまで水色に塗っては直しをくり返してから提出した。全体で個人の作品を見あう場面では、友達作品を真剣に見入っていた。

前時撮った写真を撮り直せたことは、イメージをもって描き込み始めるのに有効であった。また発想することが苦手な本児にとって、ロイロノートを使ったことは、色を塗ることでイメージを視覚化でき、試行錯誤できるので、とても有効であった。授業の後半、友達が場をどのように変えたのが見合ったことで、今後、自分が描き足していく時の参考にできると考えた。

3 授業研究会

- ・子どもたちの中に「作る」という意識（材料や制作時間等）がどこまであったのか。また、その意識をどのように子どもたちにおとしていくのかを考えたい。
- ・この授業の面白さは何か？ つくる子どもたちの面白さと見てもらう人に楽しんでもらいたいという思い、どうなれば面白いのかの根拠を明確にしていきたい。
- ・「ちょいたし」＝もとの空間を少しだけ足すことで、大きなギャップが生まれる。ここが見たての面白さではないか。ありえない！という面白さも、ここにはある。
- ・見立てるのに苦しい児童に対しては、サンプルを見せてイメージさせてもよかったかもしれない。
- ・PC は思考のツールであり、目的ではない。
- ・今日の授業で、子どもたちは「見立てる」ということがわかったのだと感じる。
- ・今後の単元展開として、その画像を、その場に飾るだけでも面白い。また、セル画で飾るのもいいかもしれない。
- ・教師の方で条件を提示し、「3 時間で作れそうなものは？」「クラス全員で作れそうなものは？」など、子どもたちがどれを制作していくかを考えさせていきたい。そして、「見立てる」ことの面白さを追究してほしい。

4 北澤指導主事のご指導

- ・治田小学校 50 周年記念によせて、見る人に楽しんでもらいたいという題材設定の良さがあつた。
 - ・タブレット端末の良さが、子どもの姿から表れていた。
- タブレット上では、子どもたちがすぐ描いて、すぐ消せる。そして、またすぐに描くことができる。

- 撮った画像を拡大したり、縮小したりすることが容易である。
- 元の画像と編集した画像を、容易に比較することができる。
- 制作の経過をタブレットで撮影していくことで、新しい発見が生まれる。

屋代小学校の画像を提示した場面で、「どうしてここに川があると面白いのか？」を問う。それにより、手すりだから人が通る、ななめになっている、手すりの幅がある、などの空間の良さを吟味し話し合いをすることで、造形的な視点が生かされる。そして、造形的な視点でふり返りをしたい。

5 今年度の成果と課題

- ・事前授業と本番授業を通して、タブレット端末を使った図工における授業展開について、有効性や課題が明確になってきたことが、成果として挙げられる。ただ、研究会や指導主事からの話でもあったように、ICT を活用する場面では、活用することが目的とならないよう考えていく必要がある。
- ・造形要素を子どもたちに意識させるためには、発達段階に応じた図工の授業を各学年でしっかり取り組んでいくことが大切だとわかった。その経験の積み重ねが、造形要素を意識できる視点（目）を育てることにつながっている。積み重ねがないのは、苦しい。
- ・図工の授業を創造する上で、「何が楽しさなのか？」「どこに面白さがあるのか？」ということ、あらゆる視点から考えていく必要がある。そういうことから考えると、単元のスタートにあたる題材設定（今回で言うと 50 周年記念と結び付けたこと）がとても重要になってくることがわかった。

更埴西中学校 3 年 中学校部会 研究の成果と課題

「田毎焼 de ふるさと再発見」

～県美研更埴大会の授業づくりで学んだこと～

千曲市立更埴西中学校 玉井 克憲

今年度、県美術教育研究会更埴大会が治田小学校と更埴西中学校を会場に実施されました。今回更埴教育会の研究補助費申請の許可をいただき、私は公開授業の授業者として、題名のようなテーマで公開授業を行いました。そのための材料費の一部に更埴教育会の研究補助費を使わせていただきました。以下に研究についての報告をします。授業公開では陶芸分野を選びました。学習指導要領に示されているものの実践が難しいとされる分野に挑戦してみようと思いました。きっかけは一年前に校長先生から「先生の得意分野で地域に発信できる素材がいいよ。」とアドバイスをいただいたことです。私は初任者で毎日が初めてみたいな教員でした。しかし校長先生からの一言で、「今の私が自信をもって取り組めるのは何だろう」と考え、出した答えは「粘土を扱う陶芸で日常に使えるものを作ること」でした。私は彫刻を専攻していたので粘土の扱いについては心得がありました。素材の研究は意識しなくてもできる自信はありましたが、地域のことやどのように教材化をして陶芸の授業にしてゆくのかについては無知でした。だからこそ様々なところを学ぶ価値があるとも考えチャレンジしてみようと思いました。

陶芸の授業の最大の難点は

- ①陶芸用の窯がある学校と持っていない学校がある。
- ②授業時間の中で準備、後片づけ、作品の保管に時間と手間がかかる。
- ③しっかり保管しないと次の時間までに固くなってしまい制作できない。

といった進め方にいくつかの関門があり時間数的には不可能とされてきました。しかし①については地元の陶芸家さんにつながることで、地域の方の協力を得ることができました。③については粘土を湿らせた布に巻き密閉することで1週間以上保つことができることがわかり実用化ができました。②については授業の工夫で準備をしっかりとすれば成り立つと思いました。このように1つ1つクリアしていくことで実際の授業ができると確信しました。あとは地域の出来事や特徴をいかにして作品に取り入れてゆくのかでした。

もう一つの問題は、私は千曲市の出身ではありません。ですから地元の先生方の話を聞き、生徒たちが取り組んできた総合的な学習の内容(地域の調べ学習や福祉施設訪問、棚田での稲刈り)を参考にモチーフになるものを探したり、校長先生によれば「昔は地元の鉄分のある赤土で陶芸を作っていた時代もあった。」というお話を参考に、学校の隣の川から粘土を採取し混ぜ込んだりすることで更埴西中にしかない陶芸ができるのではないかと思います。最終的には地域の人を巻き込んで、作品を見てもらうところまでが授業ということになりました。以下の3点で授業を進め、その中で「地域とのつながりを深めるとともに自分自身を振り返って支えてもらっている人たちに感謝する。」ということができれば良いかなと目標設定をして授業づくりをしました。

- ・ 地域と連携し地域に根差した授業づくり
- ・ 陶芸を通してふるさとを再発見し、特色のある作品作りをする。
- ・ 地域のお店、施設などに作品を展覧し地域の方に意見感想を聞く。

授業は本校2年3組で事前授業、本番では3年1組で行いました。授業で一番難しいと感じたところはどういうにして動機づけしていくか、マイカップとお皿を作る予定で授業を組み立てましたが、地域とどのようにつなげてゆくのか、今までの生徒の経験から、事前授業では本校独自の焼き物「田毎焼」として地元の鉄分のある土を数パーセント陶芸用の土に混ぜて練り色や形を工夫してマイカップを作り「田毎焼」にしました。その中で板作りの技法やへら、粘土の質感、釉薬の種類と焼成方法、道具や粘土の種類、制作手順など実際に粘土に触れて学ぶことは多いと感じました。素焼きの時に割れないやり方で行うにはどう教えたらいいか、どこがポイントになるのかを授業の学習課題において考えて授業をすると生徒にはよく理解して作品になっていきました。

焼成窯についても本校には窯がなく、近所の陶芸家さんをお願いして、素焼き本焼きをしていただくことになりました。地域のことは地域の窯でと思い焼いていただくことができて本当にありがたかったです。窯元さんからいろいろな話を聞くことができました。その昔は更埴で採れる赤土で松代焼を作ったこと。登り窯があり陶芸が盛んだった時期もあったこと。1つ1つのことが私には新鮮に思えて、生徒達にもこの話を伝え意識が高くなったと感じました。



研究チームによる板作りの研究



事前授業での生徒の様子

本番の 3 年 1 組の陶芸の授業については、地域のお店、漫画館さんや文化施設などに協力をしていただき、生徒が作ったお皿を一週間程展示していただき観覧者の感想をもらう。ということまでを目標にして制作に臨みました。地域の特産物や名所などがデザインされた作品というのが田毎焼の定義になりました。生徒の方で地域に出て写真を撮り、それをもとに陶芸に生かすように指導をしました。作品の一例としては、千曲川、日本遺産に登録された棚田、あんず、神社、森將軍塚古墳、などさまざまな切り口からモチーフを決め写真に撮ってクラスルームで共有し、形にするときのアドバイスをしました。3 年生は板作りが初めてで、デザインと陶芸のお皿が結びつかない生徒がたくさんいました。しかし、私や研究チームの先生方で示範をしてイメージを結び付け、粘土による表現につなげていきました。

研究授業当日は板作りから飾りつけをする場面でそれぞれが工夫をして、形を押し当てたり、葉っぱや稲穂を押し当てたり、さらになまこ壁などの絵を竹串で描いたりして仕上げることができました。



写真は研究授業の様子です。真剣に授業を聴いています。



稲を粘土に押し当てて制作をする生徒



授業の流れを集中して施した作品。



できた作品を写真に撮ります。神社のデザインをお皿に聞く生徒たち。



展示予定の施設 （1 月中に作品を展示します。）



蔵し館



稲荷山 満点の星



蔵し館内部



日本遺産センター

素焼き、釉薬をかけて仕上げた作品はメッセージを入れて、稲荷山地区の漫画館さんやお菓子の栄泉堂、蔵し館、姨捨駅、高村味噌店、福祉施設サクラポートさんなどに一月末に展示をする予定です。様々な人に見てもらい、いろんな意見をいただき、作品を通してつながっていいと思います。

今回、様々な人がつながって一つの研究授業ができた実感しました。陶芸家の方がたや地域のお店、お菓子屋さん、施設の皆さん。市役所の皆さん、学校の先生方の協力がなければ作品を展示することや陶芸に対する見方を理解されることもなかったと思います。生徒の成長や表現の可能性を信じて作り続けることで、魅力ある授業を展開することができるのかなと思いました。この授業は展示をして、検証をして終わりになります。今後も地域とつながって魅力的な授業づくりを頑張りたいと思います。

大会運営を振り返る ～参観者の感想より～

1. 大会テーマを踏まえ本日の授業で重要だと思ったことを 1 つ挙げてください。

面白さとは何か。

地域を大切に作る心を育てる授業

地域とのつながりを考えた単元課題「田毎焼」だと思いました。

のびのびと表現できる環境になっていることがふるさとに繋がっている点。

6 年間通った思い出の治田小だからこそ、一人一人集中力をもって表現に取り組めたと思われる。

互いに認め合える関係性。本時できていたからこそ、おのおの意欲的に取り組めていました。

子供たちの中には、紅葉した樹木など、窓から見える景色を色や形という視点でとらえ、それもとに発想する姿があった。学校への思いを表現につなげるという点で、環境の設定がよかったと思う。

地域のよさを生徒、教師自身が見つけ、どのように表現していくかを考えていく大切さ。

自分の思い、主題を明確にする事

制作への想いや願い

故郷への思いを、作品テーマにすえる。

2. 参観された授業の子どもの姿、または授業者の姿からお気づきの点を 1 つ挙げてください。

ロイノートを活用させて時間いっぱい試行錯誤を繰り返す姿。

困ったら困ったと言え、素直に表現できる可能性がある生徒達だと思いました。

創意工夫して制作する生徒の姿、生徒に寄り添う先生の姿と思いました。

フィルムの色・サイズの組み合わせを、重ね・並べを工夫しながら考え表現していた姿が素晴らしかったです。

研究会で述べたとおり、子どもは意欲的に表現に取り組んでいたが、次時以降、実際に製作するための具体的な見通しが、子どもも授業者も十分でなかったために「ちょいたし」が曖昧になり、授業者の言葉がけ（指導）も表層的なものに留まることとなった。（下駄箱を板チョコに見立て、本時の 1 時間の中で充実した表現活動を行っていたののが、学習カードの「これからどんな道具や材料が必要か」の部分をなかなか書けず、となりの児童に助けを求めようとするものの、その児童もなかなか書けずにいたことが象徴的だった）

子ども同士、教師との関係が温かい。更埴美研が大切にされている手立てがなされている結果です。自己肯定感の高さを感じる授業でした。

どの子供も、生き生きと、時間を惜しんで表現する姿が印象的だった。その背景として、導入場面での見通しの持たせ方や材料や道具の用意が適切だったからと感じた。教材研究にしっかり時間を費やしたのだと思う。また、お互いを認め合える友とのかかわりが、子供たちの表現を後押ししていた。学級経営の確かさが安心して表現できる子供たちをはぐくんでいた。

私が観察していた生徒はお皿の装飾まではいけませんでした。しかし、形を迷いながらも丁寧に修正する姿がありました。場所に合ったものを作りたいという振り返りがあり、見てもらうことを意識して制作に取り組む良い姿がありました。

試行錯誤しながら取り組んでいた姿

私が見ていた U 君は、自分なりの思いを持って制作をしていたことが、授業の最後にわかりました。

生徒同士が相談出来る所。困ったら、玉井先生に相談出来る所。

授業終わりに、発表してくれた生徒一人一人の良い所を、玉井先生が伝えていた所。

3. 今日の授業をより効果的なものとするにはどうすればよいと思いますか。

班で作るではなく、作りたいもの同士で集まって作るのはいかがでしょうか。

本時までの地域、作品への思いを高めることで、作品への願いをより明確にしていくことが必要かと感じました。

3 年生での社会性につながる美術授業・単元課題として考えたときに、美術授業数が少ないなかで、作品の制作課題工程を順序立てる（プログラム）ことはこれからの多様な社会において効率を考えて自ら順序立て行動することにもつながっていくように思いました。

すべてが効率よく考えるとは思いますが、社会の多様性や地域の状況を考え思いながら判断して行動していくことも必要なと思いました。

導入で確認された造形的な要素の活動場面での価値づけや意味づけ。

研究会で述べたとおり、本時行ったような実際の画像に手を加えて別のものをつくり出すことについては、納得いくまでやりきったところで完結にするのがよい。研究会で意見が出たとおり、方法はいろいろあると思うが、それをプリントアウトしてその現場に掲示するという方向がよいと思う。実際につくり変えることについては、場所を絞って、グループで行うことがよいのではないか。（意味は変わるが、実際の機能は 1 つも失われないということが「見立て」としては大切だと思うので、そこをベースにグループで様々な検討し合うと、おもしろい活動になっていくと思う）

協同的話し合いや作業を取り入れること。

6 時間扱いの 5 時間目であることを考えると、学習の足跡が掲示として位置づいてもよかったと思う。子供たちにとってなじみの薄い材料であり、特に 1、2 時間目の試行錯誤で見出したことが掲示されると、表現の足掛かりになる。夢中になっている子は見向きもしないが、表現に立ち止まる子は、あたりをきょろきょろし、きっと目にとめると思う。

幅が狭くなる可能性もありますが、お皿のデザインのモチーフを限定させるなどすると、その中で技術やデザインの支援がしやすくなるかもしれないと研究会で思いました。

今回の地域の素材を大切に、同じ題材でどんなアプローチができるか、さらに教材研究をしてほしいと思う。

導入場面での、自分の想いの確認や友達の想いの共有の場の設定。学びを深めるための場の設定、4 人グループでの学び合い。まとめの場面での、タブレットの効果的な活用。

もっと、故郷への思いを語って欲しかった。

加飾の仕方が限られていた。和田さんのような、付けることや、穴を開けるなど削ることもあってもよかった。縁の形に変化があってもよかったかな。

4 大会運営全般についてお気づきの点

指導案のメール配信等、より運営側が手軽に簡略化されており、よい方向だと思います。

アートは子どもたちだけでなく、私たち図美教師にとっても重要なコミュニケーションツールです。大会があることで私たちの役割がより価値あるものになると思います。コロナ禍の中、開催していただき感謝いたします。

授業研究会のみのシンプルな大会にいただいた点は、大英断だと思います。今後の 1 つのモデルになると思いました。

学校全体がアートに包まれ、美術専門でない私がとても参考になるものでした。

各支部の規模が縮小傾向にあることを考えると、コロナにかかわらず、今回のような半日開催の運営も適切

と考える。

丁寧に対応して頂きありがたかったです。

県美研の HP を効果的に活用し、会費なしで運営した点が画期的でした。

冊子でなくて pdf で配信していただき有り難かった。

5. その他

短時間で学ぶべきことが学べてよかったです。大会のコンパクト化を歓迎します。準備運営側の膨大な労力を考えると、働き方改革の視点から今後もこのスタイルで良いと感じます。

皆様、準備運営ありがとうございました。

特にありません。

会場校をはじめ、更埴支部、大会に関わったすべての先生方に感謝いたします。全県から、こうして集える機会が持てることが大切だと思います。

大変勉強になりました。ありがとうございました。

コロナ禍で、多くの対応に変化を求められる中、貴重な題材で研究授業を開いて頂きありがたかったです。

多くを学ばせて頂きました。ありがとうございました。

アンケートもこの様な方法にするなどコロナ禍から学んだことを生かした研究大会になったと思います。2年ぶりの参加でしたが、懐かしい先生方や新たな若手の先生方の姿も見られ、元気をいただきました。実際の授業を見ること、顔を合わせて話し合うことの良さを改めて感じました。少ない人数で協力して大会を運営していただいた更埴支部の先生方に感謝です。ありがとうございました。

ご回答 ありがとうございました。

編集後記

選抜展覧会会場に「マスクを着けた自画像」が登場しました。新しい生活様式の中での日常です。前年の下伊那大会に学びの機会を得た更埴支部では、コロナ禍の大会運営について多くを学び、運営の参考にさせていただきました。収束の兆しがない中、令和 3 年度の本県の会員の総力を挙げた体制で、渦中の全県大会を運営するのは誠に心もとなく厳しい状況ではありましたが、授業提供校の惜しみない協力により、二年ぶりの全県参集型の「授業公開」を伴う研究大会が開催できたことは奇跡の様でもありました。収束の兆しがない中でも、「学びの保障」は命題であり、児童生徒の全人的で健全な成長に欠かせぬ図画工作、美術科の学習の在り方については、本研究会が営々と研究し続けてきたことでした。研究の火を絶やすことなく第 76 回大会に向けて引き継いだことは、参加いただいた先生方の学びに向かう熱、ご後援いただいた各種団体のご理解、授業会場校の先生方の細部にわたるご配慮、ご尽力あつてのことでありました。本会の事務局、ホームページ担当者との連携により、基本情報の Web 配信が叶い、DX 化が運営をスリムにできたことも成果と言えるかもしれません。関係する皆様方に心より厚く御礼申し上げます。今、第六の大きな波が学校現場を襲っている只中ですが、長野県の図画工作、美術教育が本研究会会員の皆様によって、益々発展していくことをご祈念申し上げます。

更埴大会事務局 吉池光則